

一、よりばの大事と云ハ、諸々の

くせ馬をたやすく、しづむると云

も或ハけんれん或ハむながい（鞅・胸懸・鞞）、薬、手の内のあてかい、このたくひなり、是も馬ちかづけとらへて是をなす、馬

によりて人を近へよせぬなり、かやう

の馬にあいては、いかやうなる、まじなひ

ひはう（秘法）をしるといへども、さらにきよ

くなし、かるがゆえに、このきりかみを「りせつ」と号、されば、よりばの秘

法に、さま／＼のいんしゆ（印呪）くわんねん（観念）有

此くわんねんにて、馬しづまるにあら

ず、是にとうして、わすれぬるため也

是におゐて、細学のおくたと云、然

ところに平の仲国斗見出し

て、当類（当流の意か）の目付となづく、当りう（流）の目付と云ハ、馬一丈ばかり外に草

木にても、何にても、めをつけ、其目

つけに心をはめ、あゆみかかる也。少も馬

すまふ事なし。口伝有。諸々のすまい

馬出入の道に引置で、おくにつう

ゆうの人とすまふ事なし、只つう用

の人に、なるほど心意をおさめよと也

大口伝

桑嶋新右衛門尉 仲綱

鈴木主膳介

道重

水沢清五郎

文禄四乙未 二月五日 実秀

青柳与六郎殿

進覧